

<目的> 3～6歳の幼児期後期になると、衣服への関心が芽生え始める。この時期の衣服に対する嗜好の形成には母親の影響が非常に強いと予想される。そこで本報では互いに接する時間の比較的長い幼稚園児とその母親、および比較的短い保育園児とその母親に対して被服行動に関する調査を行い、比較検討した。

<方法> 千葉県の子園児 172名(男児90名、女児82名)とその母親、および保育園児121名(男児63名、女児58名)とその母親を対象とした。幼児には幼児自身の洋服の色やスタイルの嗜好、着用場面に対する知識などに関する15項目について面接調査を行った。また母親には子ども服の購買行動に関する9項目、母親から見た幼児の被服行動に関する13項目などについてアンケート調査を行った。調査データは母子間の一致性、因子分析等により解析した。

<結果>洋服の色や柄等の嗜好においては、幼稚園児と保育園児の間では顕著な差はみられなかったが、好きな色に対する母子間の一致性では幼稚園児より保育園児の方が高い結果となった。因子分析より子ども服の購買行動に関する基本的因子を抽出すると実用志向、高級志向、こだわり志向の3個の因子が得られた。母親から見た幼児の被服行動では、好みの主張、現状の満足など4個の因子が得られた。各因子の因子得点の差より購買行動に関しては、幼稚園児の母親は子ども服に対して高級志向が強く、保育園の母親は実用志向が強いことが明らかとなった。また母親から見た幼児の被服行動としては、幼稚園児は服装の満足度が高く、保育園児は服装についての主張が強い傾向を示すことがわかった。